

第1回京都府総合計画策定検討委員会 議事内容

●スポーツは「する」・「みる」・「支える」とよく言われますが、「する」という意味で言うと、スポーツをすると健康寿命が延びるとか、介護予防につながるという観点では非常に重要です。ただ、京都の場合はなかなかスポーツをする場所がありません。今後、少子化で廃校になるところが増えていきますので、その跡地を利用した運動する環境づくりが一つ考えられます。

さらに来年の4月から、中学校の部活を地域に移行する話が徐々に進んでいくと認識しています。その際に、中学校の部活だけではなく、高齢者の運動促進を含めて、廃校の跡地であったり、色々な場所を利用しながら地域とコミュニティを作っていく、例えばドイツの総合型地域スポーツクラブのような形を目指せないかと考えています。

それから「みる」・「支える」という観点では、やはりコロナにより「みる」環境は減少しており、資料にも文化芸術イベントが半減しているとの記載がありますが、スポーツに関してコロナ以降、入場者が大きく減っているというような状況です。

幸いなことに、京都にはJリーグの京都サンガ、Bリーグの京都ハンナリーズ、さらには最近卓球のTリーグのチームもできるということで、3つのプロスポーツを活用していくということも「みる」という意味では大事で、若い人も含めて「みる」ことで「する」ことへの動機づけになるのではないかと思います。

最近の言葉で言うと、well-beingという言葉があり、やはり「みる」幸せ感、「する」幸せ感をスポーツを通して醸成していきたい。そしてそのためにも、スポーツを「みる」施設環境の整備がポイントになるのではないかと考えています。

●2040年、約20年後となってくるとあまりにも遠すぎて、今の時代の流れからすると、少し想像が追いついていない気がするのが少し気になりました。

ただ、それでも2040年どんな形であってほしいか、望むべき姿はどんなものかと考えたときに、幸福度ランキングというものがあると思うのですが、世界幸福度ランキングでいつも1位がフィンランドやデンマークなどの北欧、ヨーロッパなのですが、経済的に豊かになったり健康であったり、色々な課題をクリアしても、結局人が幸せだと思っているかどうかというのが、大事なのではないかなと思っています。何をもちえて幸せかということはもちろん人によって違いますが、そういった心の在りようみたいなものを、抽象的ではあるのですが、叶えることが、これからは大事になるのではないかなと思っています。

それはもちろん健康かもしれないし、経済的な安定かもしれないし、世界情勢かもしれないのですが、色々なことがあったとしても、やはり幸せと思えるかどうかで、ちなみに日本は大体58位ぐらいらしいのですが、私が今取り組んでいることも、スタッフの幸せ、お客様の幸せはもちろん、地域全体、住んでいる人も含めて、どうすればみんなが幸せだと思えるのかということを追及し始めていまして、そこが大事かなと思っています。

2040年が描けないということをお伝えしたのですが、というのがやはり、目先に乗り越えないといけない課題が本当にたくさんありまして、資料にも書いてありますように、毎月電

気代は4割ぐらい増してきていますし、重油も2割ぐらい高くなっています。

人口減少・少子高齢化の前に、コロナが終わって、世の中が動き出すと、本当に中小企業は人手不足が激しくて、やりたいことを結局諦めざるを得ない状況です。形が整う、アイデアもある、でもそれを現実的には運営する人がいないという状況で、特に地方では本当に人手が足りません。もちろんマルチタスクとか生産性を上げるために色々なことをしようとしています、現実的にはもう70歳を超えたパートさんが3分の1ぐらい占めていて、DX化をしようにも、スマホですぐつまずいてできないような現実が目の前にあります。

従って、結局はみんなやりたいことや夢があっても、それを実現することができずに、今のままか、あるいは事業を縮小していくか、あるいはM&Aみたいな形か、どれかに振らざるを得ないような現実が目の前まで来ているなと思います。結局あちこちが人手不足で余裕がなくて、おっしゃっているような安心や温もりに目が行かないような現実が目の前にあって、どうにかしてまずは目の前の問題を乗り越え、2040年に向けて夢のあることを語らないといけないのかもしれませんが、どうしてもそこに思いがいかないという現状があるということをお伝えさせていただきます。

- 私は2040年どのような社会があるべき姿かを考えたときに、大学生同士のコミュニティを大切にする共生の京都府であってほしいなと感じました。コロナが始まり、全部オンライン授業に切り替わり、今でもまだオンラインの大学もあって、大学生同士がコミュニケーションを取る場が本当に少なくなっていることが今すごく問題だと思っていて、これがずっと続いていくことはなるべく避けた方がいいのではないかというふうに思っています。

2040年にコロナがどうなっているかは未知数ですが、大学生同士がコミュニケーションを取れる場がたくさん増えていけばいいと感じます。

また、留学生のことにに関して、論点2の今後の課題の方に明記されているように、外国人留学生が大幅に減少しています。やはり異文化交流ということで、様々な留学生と交流したいという希望がありますので、その中で留学生が大幅に減少し、大学生の年代に多くの国の人たちと交流できないということは、すごく問題だと思うので、今後の課題として挙げさせていただきます。

- 資料6について、現行計画策定後の変化という視点でいろいろ書かれている中で、少子高齢化という観点から見たときに、どうもやはりコロナ禍で出生率が下がっているという状況があります。

これ以外に日々感じるのは、生活が安定成熟化しているというようなところもあり、生活の質を高める要求や、価値観を多様化しようという観点が非常に増えているのではないかと感じています。

一方で、新たに生じた社会の変化として新型コロナウイルスは非常に大きな問題ではありますが、マイナス面だけではなく、オフィスのIT化や色々な取組が進んでいるという

ことで、当初想定しなかった部分の進捗みたいなのこともあるのではないかと思います。

一方、今後危惧されることは、世の中の変化が大きく起きてくるときには、その社会のひずみのところに一番問題がいくのではないかということで、やはりその社会格差みたいなことが大きく生じてくる可能性もあるので、2040年度の社会を考えたときに、日頃からそういう視点を持って取り組む必要があるのかなと感じているところです。

また、現在はどちらかというと社会のシステムに人が合わせるというようなことなのですが、2040年度に望ましいと私が思う姿では、その人が望んでいることに社会のシステムが逆に合ってくるような、そういった社会にできたらと感じています。

それに向けては、色々な技術革新・テクノロジーが多分出てくるということを踏まえ、世の中のことを考えながら、計画を立てていくことが重要ではないかと思っています。

最後にやはり京都の強みというのは多分あると思います。新しいことに取り組み、けいはんなもそうですが、世界と繋がっていることを生かしながら、2040年度の京都府の社会が先ほど言ったような社会になればと感じているところです。

- 2040年度の京都のことについて考えるときに、国籍・性別・人種など関係なく、自由に自分らしく生きているダイバーシティな人々の居場所を想像しています。

京都には学問の frontline を走っている大学や研究所があると同時に、1000年の伝統を引き継いでいるお店もあるからこそ、様々な知見が融合し、新しい価値やアイデアが生まれるところになって、京都府が知的自由と多様性を誇るイノベーションの拠点になってほしいです。いつ見ても京都は美しく、力強いです。

一方で、そんな魅力的な京都も近年人口減少が始まってしまいました。人口減少を止めるには少子化対策をしなければなりません。少子化対策にはいろいろな要素がありますが、私が大事だと考えていることの1つは、女性が活躍しやすい場所であることです。

日本人が理想の人数の子どもを持たない理由は、多くが今以上の生活費や教育に係る経済的負担に耐えられないからです。この問題を解決するためには、夫婦は共働きをする必要性が生まれます。

しかし、現在企業における女性の社会進出は、男性の社会進出に比べかなりのギャップが残っており、様々な調査で女性が活躍するステップである採用、教育、継続、昇進という、4つのステップで女性が不利に扱われることが明らかになっています。

ですから、この美しい京都のエネルギーを支え続けるために、企業を中心に女性が働きやすい環境を作り、少子化から脱却して、人口減少を止める必要があります。

これは私が京都で実現したいことでもあり、女性活躍を推進する民間企業スタートアップの技術、いわゆるフェムテック事業をサポートして、女性が働きやすい京都府に貢献できればと思います。

●私にとって、京都は憧れの場所です。

これは別に私に限らず、海外の人にとってもそうなのですが、よく我々は国際会議などの企画会議をします。アメリカと会議をするとよくワシントンDCでやるのですが、それをハワイに変えた途端に人が集まるわけで、そこでじゃあ日本でやると言う、またみんな目が輝き、さらに京都でやると言う、日本人もアメリカ人もぱっと目を輝かせて行くと言う、そんな憧れの場です。それが2040年になっても、憧れの場所であっていただきたいと思っています。

各国の危機管理を見ていますと、ある意味、国レベルで危機管理を強化する、強化しているように見せるのは簡単で、要は人材とカリソースを全部国に集めてしまえば、危機管理がすごく良くできているように見せることはできます。

ですが、本当に危機に面したときに強いのは、地方の隅々にきちんと専門人材がいて、それぞれにネットワークができていると、これが一番強い危機管理です。

これは日本でも当然同じで、やはり地域毎に危機管理体制がきちんとできていることがこの新型コロナを経験して非常に重要なことだと思っています。

特にそのプレーヤーとなる行政、保健所、地方衛生研究所、それから民間医療機関、公的医療機関、それから大学専門機関、こういったところに人材がきちんと育っていくということが非常に大事だと考えています。また、そういった人材が地域でシームレスなネットワークを作ることが、強さを作っていくものだと考えています。

もう1つ申し上げたいのは、危機管理を考える上で、日本はすごく復習型の危機管理が好きで、昔経験したシナリオを何度も何度もしつこくやって、何か出来た気になってしまうところがありますが、危機は二度と同じことは起こらないので、これから10年20年にどのような新しい感染症がやってくるかという視点でまず捉え直して、そして今後必要なものは何かというのを積み上げていく、そういった過去問思考を脱出した新しい危機管理を行っていく必要があると考えています。

●就活といえば、会社の情報収集が99%占めているのですが、若者に限らず、再就職探しについても、会社情報とか条件などを一番先に自分の仕事としてやっていますが、一方で、自分の働き方や職業観、生き方の価値観を考える時間がすごく少なく、それ以前に、そもそも自分の働き方を考えることを重要じゃないと思っている人が多いです。

一般はこうだろう、普通はこうだろうということで、その一般と自分が違っていいということや、個人個人の働き方を自分で考えていくことが本当に大切だと思いますが、その前に、自分の長所短所を理解することがまず必要であり、それを理解しながら自分がどうすれば幸せな働き方ができるのかを順番に考え、段階を持たないと、いきなり就活となるとミスマッチが起こって、就職支援に来られるわけです。

昔はアルバイトをして社会体験をすることが多かったのですが、今はほとんどマニュアル化しており、アルバイトを採用する側もフランチャイズの場合はほとんど割り切った関係

になっているので、その中で育った若者は今までに尊敬する人がいない、生きてきて感動したことがない、ということを実にズバッと言います。全く考えたこともないと。

遡って昭和の時代は、兄弟の面倒を見たり、家での仕事をしたり、町内の地域の行事に参加したりということで、勉強以外で割と忙しい。煩わしかったけれども、その中で悩んだり考えたりしてきたのですが、今は少子化になって兄弟も少ないので、家での仕事を言いつけられて困っている若者はほとんどいません。

「子どもたちの考える力を生み出し育てるためには。」という質問があるのですが、これは大人たちが子どもに質問するときにクローズクエスションではなくてオープンクエスション。クローズクエスションは、イエス・ノーや具体的に単語を並べたらいいものです。これは試験のときに採点しやすいのですが、オープンクエスションは、「こういった考えで、なぜなら〜」という自分の言葉で喋らないといけないのですが、これが本当に少ない。機会もないし、そこまで話す時間を大人たちが遮ってしまうところがあるので、しっかり自分の言葉で、自分のことを話す機会を増やさないと、また、その中で価値観もそこでアウトプットしないと、なかなか考える力や表現力も育ちません。

また、地域活動というか、地域の課題に対応している団体自治会と NPO が極端に減少しているということも、資料で見まして、これってどういうことかなと思っています。学校以外の役割と先程申しましたが、このようなところにどんどん若者を参加させたり、年齢の異なる多様な人、目標を持って社会参加をしている会社の代表などからどんどん話を聞く場を若者に提供することも必要かもしれないし、海外ではボランティア活動が盛んに行われてきましたが、それを日本中でできるようにしたプログラムをたくさん作って、それを今、若者に提供することが、考える力もしくは人生の道しるべとなるのではないかなと思います。自分の人生に意味を持って生きないと、人生自体を生きようとならないし、少子化が止まることはないと思います。

若者に対して周りの大人たちが背中を見せることも必要です。

人生 100 年時代にどの世代でもやりがいを持って仕事に取り組めることにより、生産労働人口が増えれば、これからの日本に多少なりとも未来があるかと思っています。

- 2040 年にどのような社会があるべきか、個人的な思いですが、自分で値段のつけられる農業とは何かとつくづく思っているわけで、直販所において自分で値段がつけられるとか、販売方法で工夫できることはありますが、農産物というのは、なかなか自分で値段がつけられません。まさに今、肥料や燃油がものすごく値上がりしていて、各産業において値上げのラッシュになっています。

この値上げ自体、私はそんなに悪いとは思ってないのですが、農産物だけは燃料や肥料、資材が値上がりする中でもなかなか値段が上げられません。このような商売をやっているとなかなか担い手が増えないのが現実ではないかなと思っています。この問題についてはなかなか解決が難しいと思っていますが、後々やはり解決できないと、農家の担い手が増えて

くることは少ないかなと思っています。

前からですが、農業の担い手がないことから耕作されない農地が増えてきています。そのため、里山の近くがかなり荒れてきていて、城陽では、都市近郊農家なのですが、新名神高速道路が城陽の町を貫くということで工事をしていただいて、大変ありがたいのですが、山の中を工事すると、山の中に住んでいる鹿たちが近くの畑にやってきます。困ったもので、「家に鹿が来たけど何かいい方法はないですか。」と話をすると、「それはもうフェンスを張るしかない。」と言われます。

一方で、美山では、鹿が今年何頭か網にかかって死んでいたが、人を集めて処理しに行こうと次の日に行くと、熊が全て食べてしまい、骨だけになっているそうです。やはり獣害というものは農家にとってもすごく大変です。そういった中で、やはり農業を営みながら生活をしていこうとするのはものすごく難しいと思っています。

ですがその中で、今、戦争でウクライナから小麦が来ないなど、色々ところで食料安全保障といった話も多々出ており、環境のことや食料のことを考えると、農業という産業は維持をしていかなければならない。では、どのようにすると維持できるか、これを農家だけで考えるのではなく、京都府などの行政も一緒になり、府民なり国民なり、全体で今一度考え直すような形を作っていってもらいたいなと思います。

国がみどりの食料システム戦略の中で、2050年には農薬を50%減らしましょう、有機農法で25%、100万ヘクタールの農地を増やしましょうといった、いわゆる循環型、環境にやさしい農業をやらないと駄目ですよといった政策転換をしてきましたので、農家としてもこれからはそのようにやっていきたいし、また、余った農地ではソーラーシェアリングというような形で、下は農産物を作り、上で太陽光発電をしながら、化石燃料を少しでも減らすことに我々も寄与していきたいなと思っています。

農業を何とか生命産業として維持していくように、この計画の中で、皆さん方に理解をして検討していただいたらありがたいかなと思っています。

- 現行の計画の方でいろんな意見を述べさせていただいて、その時にも私はコミュニティの話がたくさんさせていただいたと思っています。コロナが起こってどのように私の中で意見が変わったかと言いますと、1つは実体験として感じていることとして、仕事のやり方がずいぶんと変わりました。

人に会って会議をすることがなくなって、Zoomでの会議となると、実は私はどこでもドアが手に入ったと思うぐらい、本当にたくさんの会議が1日でこなせるようになったのです。今までは外出するのであれば多くて3件だったものが、6件、7件とできてしまいます。ということは、どこに住んでいても仕事ができる環境がみんなに提供できているということがコロナをきっかけに起こったことなのかなと感じています。

これが20年後、このまま続いたときに、人間の意識はどうなるのかと考えると、価値観や住む場所が仕事以外のことで選べるようになるので、どこに住むのかということの価値が

上がっていくような気がとてもしています。では、京都に住むということ、京都の意味づけというかその価値が住む人たちにどのような意味になるのかを少し考え始めているのが、コロナがあった後の私です。

そして、もう一つコロナが起こって感じたことは、私も子どもがいますが、20年後息子・娘の体力は大丈夫だろうか、ととても心配しています。この2年間ほぼ運動ができない状態ですが、大人と子どもではやはり全然違うのではないかなと考えており、20年後の子どもの健康がとても心配です。

といったことを考えていると、京都に住んでいて、体作りに興味を持って考えていると、地産地消のものをきっちりと食べていく、自分たちでその物を作るという経験をすることが大切だと思います。地域で体を動かしながら物を作って、その物を食べるということは子どもたちにとってもすごくいいし、自分の健康という意味でもいいし、その土地に根付いた食べ物を作るためにはその気候を知らないといけない、その文化を知らないといけないといったように、自分の住んでいるまち、土地、土を勉強するすごくいい機会になるのではないかなと思っていて、そういった教育ができると、色々なことが繋がっていくのではないかなと感じました。

京都ならではというところで言うと、やはり京都には文化がたくさんあります。

芸術など、色々なものが文化としてあるのですが、日常に文化がプンプン香るような生活が京都でならできることがやはり価値だと思うので、京都の町家にある文化、それは文化と私達は呼びますが、おそらく知恵なのだと思います。そういった町屋の中の知恵を、京都に住んでいる人であればみんな知っている位の教育ができると、その土地に住んでいる価値が上がっていくのではないかなと考えていました。

やはり人間は土地がないと生きられないので、その土地をよく知り、そこで土地に育ててもらうためにそこで物を作ってそこで食べるといったことが子どもの頃からできるような土地になっていくといいなとコロナになって感じた次第です。

- コロナとウクライナにおける戦争からまだ世界は抜け出していない訳ですが、そこでの共通テーマはデジタルです。コロナで世の中のデジタル化が一気に進みました。そして、ウクライナはサイバー攻撃、フェイクニュースといったデジタルが主戦場になった人類初の戦争です。

2040年を展望しますと、デジタル化がすさまじく進んで、真ん中になっていると思います。GIGAスクール構想の中で、パソコン1人1台で学び始めた世代がみんな就職している頃で、オンライン空間でほとんどの時間を過ごす人も多くなっていると思います。また、技術、AI、人工知能が人の能力を超えるシンギュラリティが来るのが2045年とされていますが、2040年にはかなり進んでいます。

つまり、デジタルやデータが社会、経済、文化の基盤になっており、それに取り残されない、というよりも先取りをすることが大事です。

京都の世界的な強みというのは、私は文化と長寿企業と大学が集積していることだと考えますが、これをデジタルなどの技術で発展させていくことが基本戦略かと思います。守るよりも攻めの戦略を、京都は描けるポジションにあると思います。

配られた論点ペーパーの2枚目を拝見しますと、それぞれの項目で、オンライン医療、GIGAスクール対応、DX業務効率化、オンライン国際会議、ネット人権、テレワーク移住、ほとんどの項目でデジタルが課題になっていまして、その認識は正しいと思います。

このように全てのテーマに横串を刺す、そういう課題ですので、そこで政府は鳴り物入りでデジタル庁を設けましたけれども、まだそれもうまく機能していないと聞いています。それほど重要で難しいテーマなので、京都府も全体としてDXにどう取り組むのかという戦略とアクションが必要になってくると思いますし、目標も据えた方がいいのではと思います。その際、これを担うデジタル人材やデータ人材をいかに確保、活用するかが最重要ポイントになると思います。産学官を挙げて取り組むべき課題だと思います。

- 最近の大学生の変化について少しお話をしたいと思うのですが、オンライン授業に、というのは今までもお話に出てきましたけれども、今大学は原則対面でもオンライン併用なので、オンラインで受けてもいいよといった、ある意味ハイブリッドで授業を再開していますが、大学生が授業に戻ってきません。学生たちが今、これだけオンラインに慣れてしまうと、むしろ対面型の授業に対してあまり重きを置いてこないのです。

実はこの様子は高校生にも見られまして、大学生の様子を伝えた上で、もし君たちが大学生だったとすれば今、オンライン事業を選ぶのかそれとも対面で大学に行ってみたくらいのかどちらかと尋ねると、8割の高校生がオンラインを選びます。

つまり、対面で大学に行きたくないという学生がすごく多くなってきたのですが、これをもう少し分析的に見てみると、ちょっと違う風景があります。

例えば、学校にスマホを持ち込んで、休み時間にスマホを使ってもいい学校は、オンライン型の授業を受けたいという子たちが多く、一方で、休み時間はスマホの不使用を奨励している学校になると、俄然、対面型で大学に行きたいという生徒の数が増えてきます。つまり、おそらく仕掛け方なのだと私は思います。

ただ最近の小学生、中学生、高校生もそうですが、繋がる力がすごく弱くなってきていることが確かにあって、それはコロナの影響で相当加速化したのだと思います。ただし、手をこまねいていたら、大学生がそうであるように学校に戻ってこなくなってしまう。こうなると、利便性の後ろに何か大事なものを置いてきたような感じがします。

だから仕掛けないといけない。ただ、繋がる力が脆弱な子たちに繋がれと仕掛けると、今度は逆に学校に来なくなってしまうといった弱点もあります。だから、この辺をどのようにうまく折り合いをつけながら、子どもたちに学びの環境を提供していくかを我々は真剣に考えないといけない、そういうフェーズに来たかなと思っています。

京都府教育振興計画の第2次プランができて、この間ずっと教育振興計画で大事にしてき

た、串刺しにしてきたフレーズとして「包み込まれ感」という言葉があります。その包み込まれ感をずっと具現化してきている京都の教育に大きなデータ上の変化があるのは、将来人の役に立ちたいと思う子どもの数がすごく増えてきたということです。

だから、包み込まれれば、あるいは包み込まれ感に包まれれば、子どもたちは人の役に立ちたいと思う、といったことを知事からご提示いただいた温もりやあたたかさという言葉で、どのように計画の中に具現化していくのか。そのようなことを考えてみたいと思っています。

- 2040年となりますと、18年後ですが、そのときには間違いなく人口減少が進み、高齢化が進み、今でも既に課題である介護の関係、痴呆症が今まで以上に広がっていると思います。もちろん医療の進歩により様々な薬は出ていると思いますが、相当大きな影響が出てくるだろうなと思っています。一方で、コロナ禍において自宅で仕事ができるなど、会社に出なくても仕事ができる環境はできつつありますが、これは事務方の方についてはできますが、現場で物づくりをしている方はやはり、企業に行かなければできません。

元々IT化という中で、情報セキュリティの関係を含めた事務の方についてはサテライト方式を企業でもとりながら、出勤とか出張とかの手当も防ぎながら、情報も取りながら、ということは今後拡大していこうというつもりでしたが、コロナ禍においては一挙に「自宅のお仕事」という形になっています。

こちらについてももちろん課題はまだありますが、いいところを使っていくということを考えたときに、今本当に、安心できるということが一番のキーワードだと思います。為替も変わり、物価高、そしてなかなか賃金が上がらない中で、非常に生活が苦しい状況が出てきています。これが2040年にどうなっていくのかということではありますが、やはり収入が安定しなければ、なかなか安定した生活は望めないと思います。

子どもを産まないというのは、産もうと思っている方も、教育費など、育てるのにお金がかかるからということが多いと思います。従って、子どもを増やそうと思えば、できるだけ早くにお出会いをしてということもありますが、しっかり子どもを育ててもお金がかからない状況も作らなければいけませんし、まず働き方についてもいろんな業種が選べて、そして収入も安定するということが大事だと思います。

特に人口減少でこれから助け合いが絶対に必要になってくる中では、企業の中におられても、一社だけで生涯を終えるというより、メインの仕事をしながらか、空いた時間に有償で社会貢献するようなことが必要じゃないかと思っています。

企業は週休2日、そして週3日に向けてシェアを入れた形で動き始めているところもあります。そういった意味では、空いた時間で取り組む社会における助け合いの中で、そういったことを勉強しながら、周りの人を助けていくということが、京都府全体でできるようになればいいなと思います。京都は創業100年を超えるような企業がたくさんあります。地域に支えられて仕事をされて、そして地域で育ってきた、そういったまちです。

そのまちを選んでいただき、地域で助け合いをしていくためにということについて、様々な形で話ができればと思います。

私が一番心配するのは、もちろん少子化ということがありますが、1人住まいです。1人で生活されている方が相当増えてきています。

高齢者の方でも、お1人住まいの方に何かことがあったときに、本当に周りでネットワークがあって対応できるのかと考えれば、これから数十年の中で本当に安心安全なまち、京都府に住めば周りの助け合いがあって、そこで苦しいことなく生活ができ、助け合いの中で生きていけるようになろうかと思しますので、ぜひそういったところを一つずつ、できることを私達も考えながら提案し、助け合いでまちに根付くと言いますか、そういったまちにしていただければと思います。

少なくとも私が幼少の頃は祭りがあり、近所のおじいちゃんやおばあちゃんに怒られながらも助けてもらう、そういった生活がありました。今、そういった時代は難しいですが、これからを考えればその時代へ還るといったことを真剣に考えながら、提案をしていきたいと思えます。

●和装産業や伝統産業はこのコロナで見える景色が一変しました。その一番大きな理由は使ってもらえる機会が消えてしまったことにあります。

例えば和装関係では、結婚式や大きなパーティー、お茶会、観劇といったものがことごとくなくなりました。特に女性の方はそういうときに着物を着装していただくという場なくなりました。そして、それにより買っていただく動機が消えてしまいました。2年前の5月、6月はメーカーの発注がほぼゼロという状況になっていました。他の伝統産業品も主にデパートや商業施設で販売をされていた訳ですが、そのデパートや商業施設が休業された訳ですから、全く同じような状況だった訳です。

ただその中で、特に和装業界はコロナ禍前から非常に厳しい状況になっていました。この大きな原因は、生活様式が変わってきたということもあるのですが、業界が過去、大変景気の良い時代を経験していたがために、色々な対策をそのときに立てずに、悪い悪いと言いつつながら、今までズルズルと手を打ててなかったことが大変大きな原因であったとも思っています。そこへコロナが来て、本当に産地全体あるいは業界が今、大苦戦をしているというところなんです。

その中で、「生活様式の変化」という言葉はコロナの影響もありますが、それ以前に典型的な日本人のライフスタイルが、外から、あるいは色々な情報が入ることによって変わってきました。キーワードで言うと「便利、簡単、楽、安い」という概念が非常に大きな価値観になっていて、色々なものが金太郎飴的な、どこに行っても同じようなものになり、ファストファッション、ファストフードなどにより、伝統産業や日本の文化自体について皆さんが意識していただく注意が薄れていったことで、これはもう伝統産業、和装業界に携わっている人間と言いますかの努力不足が一番の原因だと思うのですが、今、ようやく危機感を持って

対策を立て出している訳です。ただ、今の状況を見ていますと、DX化やICT、メタバースであるとか素晴らしい技術があり、もうしばらくしたら映画で見ていた、ロボットが人間を支配する、またあるいは、猿の惑星のような時代が来そうな気が本当にしてしまうのですが、人間のその方としての幸福度を見ていくと、その「便利、簡単、楽、安い」ということだけでいいのだろうか、あるいは技術的に非常に進歩する今の日本社会がいいのだろうか、特にこういった技術の進歩は日本だけではなく世界中で進んでいる訳ですから、そこで本当にレッドオーシャンになってしまう。

その中で、特に京都府さんをお願いしたいのは、その京都の強みを生かすというところを、特に伝統産業、あるいは和装もですが、私は、この京都の強みというのは、伝統、文化、そして革新というこの3つがキーワードではないかなと思っています。

私も京都西陣生まれで、現在西陣中央という小学校の前身のところに通っていたのですが、その凄さというか、自分たちのまちの良さ、仕事や技のすごさというのはそういうところで育っていると全く気がついていない。例えば、私は自宅が御室の方なのですが、すぐそばに国宝の御室仁和寺があり、龍安寺があり、金閣寺があるのですが、灯台下暗しでいつでも行けると思ってしまい、まだまともに行ったことがありません。お恥ずかしながら。その前は頻繁に通っているし、例えば妙心寺は散歩などで歩いたり走ったりはしているのですが、じっくり見たことはありません。また、「退蔵院の桜がすごく綺麗ですね、いいところに住んでいますね。」「そうなのですか。」と、少し恥ずかしいのですが、灯台下暗しではないのですが、自分たちの強さをもう一度再認識する必要があると思います。また今年、西陣は555年ということで、これを起点に新たにブランドの再構築をすると同時に、西陣や和装など、この京都の伝統産業の強みを再認識しなければいけないと思います。

わからないまままでブランド展開を広げると非常に難しいかなというふうに思っています。その辺をぜひ、今回の中に盛り込んでいただけたらと思っています。

- テーマとしては少子化の加速と婚姻の減少が着目点だなというところで、資料を見せていただいたのですが、将来的に京都が子育てしたいエリア No.1 を目指すとすると、まず女性の母親予備軍となる方々が将来子どもを作っていくビジョンが見えないのかなと思っています。

今私の職場では、新入社員は女性が70%を超えています。その位女性ばかりが入社しているので、しっかりその方たちを育てて、やりがいのある仕事、やりがいのある育児というところを育てていかないと、私達の事業も成り立たないというところに至っています。

私が10年前に入社した折には、出産してから育児をしている女性が復職した例はなんとゼロという状態でしたので、この10年間で2人目を出産し、戻ってきてくれた人が何名か出てきましたが、まだまだ制度が整っていない状態です。

一方、私は子育てをしながら12年間専業主婦をして、37歳で復職をしましたが、私の時代は女性1人が子育てすることが美德だという状態でしたので、その中で私が取り組んだの

が、母親サークルを作り、15年間活動していたのですが、そのときに私が思ったことが、子どもをかわいがる、子ども中心の母親サークルではなく、本当に悩んでいる母親、「私のキャリアなんて駄目だ、私の人生に自信がない」という方が本当に多く、そういった母親を元気にするための母親サークルを作りました。

やはり、母親である女性自身が今の生活の中でやりがいを持つ、達成感を持つというところが大事なのではないかと考えております。

また先日、アメリカにご主人の転勤とともに移住した、小学4年生の息子を持つ30代の女性と話をしました。アメリカの子育てと日本の子育てとどういった違いがありますかという話だったのですが、実際はアメリカも全然進んでいる訳ではないよ。という答えが返ってきました。つまり、子どもが安心・安全な環境でない国では、送迎含めて親が本当に付きっきりで、余計密になる状態で、ある意味子どもが自立をしていない状態でもあるらしいのですが、ただ皆さんとお話すると、「夫がオールマイティに家事をしない、夫が子育てに全く関与してくれない。」といった不満は日本の家庭と瓜二つだとおっしゃっていました。「キャリアを捨てたり、もう中断するしか女性の私達にはないのよ。」という愚痴がアメリカの女性の中でも同じようにあったのですが、やはりこれはもう国の違いでもなく、国の進歩の違いということでもなく、母親である女性がどんなステージを歩んでいるか、どんな制度の中でしっかりと歩んでいけるかといったところが大きな違いになるのかなと思いました。

また、彼女自身は日本で起業して代表を努めながら、どうやって子育てと職業を充実していたかというところについては、圧倒的に周りに頼る、そしてその中でもキーポイントはパパに頼る。パパと言っても、近所のパパにも頼る、というところで、パパがどれだけ子どもとの時間を費やすかで子育ての醍醐味も変わりますし、実際にはママが子育ての醍醐味を独り占めしているという状況も裏にはあるとは思いますが、そういった男性の育児参加と言いますか、その育児の醍醐味にどのように関わらせていくか、というところが1つ大きなキーワードになるのではないかと考えております。

- 私も現行の計画策定のときに参加させていただきまして、その時の大きなテーマは人口減少をどうするかということだったと思いますが、2040年、約20年後という具体的な数字が出たのは、超高齢社会に突入して高齢化率がピークに達すると、1億2400万人いる人口が、1億ぐらいになるといったことで、京都も多分20%ぐらい人口が減ってしまいます。中でも、減るのは高齢者ではなく若い人たちということで、例えば、現状では2.4人に1人ぐらいの高齢者が、2040年位には1.~人に1人といったことで、若者の負担が非常に大きくなっていくことが一番大きなテーマでした。家庭という1つのくくりの中では、もう子育てが難しいといった状況なので、新しいコミュニティのあり方のようなことを私も意識してお話をしてきたような記憶があります。

資料の6を見せていただいて、新たに生じた社会の変化課題というのは、確かに大きな問題で、我々の生活に大きなインパクトを与えているのですが、従前、現行の計画策定のとき

の課題というのは全然変わってない、どころかコロナのおかげで対策がストップしていて、むしろ悪化してしまったということがやはり現実です。

人口減少・少子化社会は、要するに高齢化ももちろん問題なのですが、一番大きいのはやはり少子化で、今の合計特殊出生率のままでいくと、人口減少が止まらないという状況です。2040年という具体的な年は挙げているが、そのときにどのような状態になっていけばその先は改善されるのかについては全く議論されていません。実は人口減少を止めようと思うと、2.06という出生率が絶対的に必要だというのがわかっているのですが、もう既に今年生まれた子どもたちはコロナの影響もあって81万人程であり、その子どもたちが20歳、30歳になる20年後、30年後は、もう母親がその半分、40万人しかいないということになってくるので、これに早く歯止めをかけないと、若い人たちに負担をかける社会がずっと続くということになります。

私はやはり、少子化対策が最も重要な課題であると思います。コロナやウクライナ、ウクライナは人間がやったことなので本当に腹立たしいですが、こういったことはいずれ人間の英知が克服していくものだろうと思いますし、同じことは起こらないので、今のコロナを参考にして次の対策を立てていると多分空振りになるので、やはり色々なインパクトがあって、我々が考えている計画というのは、少しペースが落ちる、あるいは逆行するかもしれないということを考えながら、計画を立てていくなど、予期せぬインパクトが来たときに対応できる体制を作っていくことがすごく大事ななと思っております。

基本的な課題は変わっていないということを改めて申し上げて、私の方のお話をさせていただきます。

- 2040年にどのような社会があるべき姿かというお題なのですが、なかなかあるべき姿を考えるのは難しいなと思っています。むしろ、こうあってほしいなと、こんなふうになったら楽しいなんてことを考えるのは非常に面白いなと思っています。

そういった中で、例えば私は別の会議で、もう少し先の2050年を考えて、どんな世の中になるかなと若手の技術者の方とお話することがあるのですが、そこで結構面白いアイデアが出てきます。例えば、もう自動車は全部空を飛んでいるとか、物流は全部地下を通ってくるといった話になったときに、残った空間はどのように使えるかな。こんなこともできるし、こんなこともできる、といった話をしています。

せっかくなので、こうやったら面白いな、というような話ができるといいかなと思っています。

私は京都に住み出して約30年なのですが、その頃に今の2022年が想像できたかという絶対できていなくて、その当時、7万いくらという結構高いお金を払って固定電話を下宿につけていましたが、今はもうほとんど固定電話は役を果たさないで、代わりに出てきたスマートフォンについても、今はもうフォンの意味もほとんどないのではないかという程です。そう考えると、20年後、30年後の想像はやはり難しいと思うので、やはりこのようになって

てほしいといったことを考えたいと思います。

コロナが色々な問題を引き起こしているのは間違いないのですが、その一方で、せっかくなので前向きな話を考えようと思うと、こんなこともできる、あんなこともできるということに気付けたということにやはり大きな意味があるかなと思っています。ひょっとしたら5年、10年経たないと起こらなかったことが、コロナの影響で早く来てしまったと考えることができると思います。そこで、非常に重要だと思うのは、IT技術も含めて色々なことができることがわかったこと。また、やってみたら使えるものが出てきたこと。あとは、そういったものをどのように生かしていくかということ。つまり、選べる選択肢が増えたとは私は考えています。

そういったものを前提にすると、色々なところを選べるとともに、その選んだ結果は人によって違って、むしろ、そういった多様性をどのように考えるかが大事で、多様な生き方や生活ができるということが大事で、それが例えば、月並みのことかもしれないがダイバーシティ&インクルージョンのような話だと思います。

もう1つは、そういった生き方を支えるまちや都市がどうあるべきかと。

都市の側も、色々な多様な地域がやはりあるべきだと思います。京都府と言っても、広いですし、これまでも海の京都、森の京都、お茶の京都のように、多様性をおそらく求められていると思うのですが、さらにその中でもやはり少しずつ違うと思います。

そういった意味で、まちや都市は、多様な生き方をする人を受け入れることができる多様な地域をどう作り上げていくか、我々はそういったものを、許容力みたいな感じでアーバンケイパビリティと言ったりします。全ての場所で、全ての人が同じように生活することは難しいかもしれませんが、少しずつ違うところで少しずつ違った生活ができるようなまちにしたいと考えながら研究を行っています。

そういった中で、最後に考えないといけないことは、その地域の固有の文化や資源、また、その地域で一番固有のものである人材を生かしたまちづくりを考えていくことが重要なポイントではないかなと考えております。

- 約20年先の2040年を考えたとき、どのような社会があるのだろうと想像してみますと、今生まれた人が20歳になり、現時点でコロナ前より結婚婚姻率が20%減少になっているので、イコールではないとは思いますが、例えば子どもの人口が20%位減少してしまったとすると、小学校も5つあるうちの1つが閉校になり、そして家も、隣近所の人も5軒あったら、1軒住んでいないとか、極端に言うと、その様な状況を想像します。そして、人口減少によりコミュニティがとても小さくなり、国力も削がれてしまいます。私達は、将来日本が発展していくと思うからこそ、夢があり、希望を持てる訳で、国民が希望を持っていくためにはこのままの状況ではいけないと思います。やはり、諦めず、もうこの人口減少は仕方がないとは絶対に思わず、もっと必死に人口減少にブレーキ踏み、止めようと行動しない限りは止まりません。私達はこの大問題を見て見ぬふりをするのではなくもっと必死になっ

て考えないといけないと思います。私は、20年先を考えた時この人口減少の影響が非常に心配です。

しかし、我々は、次の世代の為に20年先を描がいていくべきで、20年後の京都がもっと魅力的な都市になっていかねばなりません。

京都は、小さなコミュニティに貴重なものがある魅力的な都市であり、やはり文化庁も移転するという事で、最大の武器は文化であり、伝統産業があり、そしてグローバル企業があり、たくさんの大学があり教育も行き届いています。そして、京都府ではDX技術も結構進んでいて、非常に豊かな自然もあり、海もある、沢山の財産を持っている都市だと思います。また、企業側からすると、これから、人口減少により大学生の採用も取りにくくなっていくので非常に困るのですが、人が少なくなってもやっていけるやり方ももちろんあり、一方で人がいないとできない仕事もあります。ICTであるとかそういったデジタル技術に取り組んでいかないといけないが、やはり優秀な人が必要であると考えます。日本人はグローバル化が非常に遅れており、英語や他国語が話せないことが、海外に出ていく障害になっており、企業でも海外進出の障害になっていることも事実です。また、英語を習ってもそれを育成できる場が少ないと感じています。しかし、これから京都に留学生の方が増えれば、英語を話せる場もでき、そして大学にもそのような場も作っていける。そういった意味では、今後コロナも落ち着き、海外の方も日本にきていただけるような状況になれば、色々な国の人たちが集まるコミュニティが生まれ、そしてその国々の文化、そして色々なやり方を学べる素晴らしい未来もあるのかなと考えられるのではと思います。

20年先、人口が1億人位までは減るのだと思うのですが、少なくなったからといって決して諦めず人口維持に努め、希望をもって、グローバル化を一段と進めることが重要ではないかなと考えます。

- 私は1963年生まれですので、大学に若干遅れて入学し、卒業間近のときには、女性差別撤廃条約を日本が批准し、男女雇用機会均等法ができて、その第1世代として就職活動をしたのですが、何かバラ色の世界に出たつもりでいましたけれど、日本のジェンダーギャップ指数というのは皆さんご存知のとおりで、ちっとも上がらないという残念な状況にあります。

その中で、都道府県のジェンダーギャップ指数を上智大学の先生が出されましたが、京都府は確か5位で、これは府議会での取り組みが評価されて、女性議員さんの欠席理由に出産や育児、介護が入っているか何かで新聞で報道されていたので、大変嬉しいと思いました。私は元々出身が京都ではないのですが、今は家族も親も含め、一族全部京都に住んでおりますので、大変嬉しいなと思いながら報道を見ています。

京都には、いろんな方々がいらっしゃって、そして大学があり、学生もあちこちから来ますし、いろんな企業にも人が来るし、研究者も来るし、というところですので、そして歴史的にも多様な人たちが住んでいるところですから、やはり人権のことを考えるときには国際

基準で考えていただきたいということが根底にあります。

また、京都が一番大規模なヘイトスピーチが最初にターゲットにした地域の1つであり、安心・安全や温もりと言ったときに、誰も置き去りにしないというか、きちんと位置づけて、皆さん1人1人が、京都の市民として、府民として生きているということを前提に話をしていきたいと思っています。

そのときに思いやりや優しさ、労りという言葉がよく人権の領域で誤って使われてしまうのですが、同じように温もりも誤って使われないようにという願いがあります。人権というのは英語で書くと human rights になりますので、人間の権利には“s”がついています。具体的に数えられる基準である、これが人権であり、決して抽象的なものではないということが1つと、そういった基準を私達がきちんと理解して、それをみんなが持っているということを前提にしていかないと、排除されたかわいそうな人たちを助けてあげる、というような感覚だといつまでたっても人間の尊厳が実現できないといつも考えているところです。

日本が障害者の権利条約の締約国になって、それから障害者差別解消法ができましたが、合理的配慮というものが、重要なキーになって入ってきていて、これはみんなが権利を持っていて、その権利を実現するために必要な合理的配慮をしようということなのですが、何か「配慮」と言うと非常に道徳的な言葉になってしまうのですが、合理的な調整をする、この調整をきちんと提供しないことは差別であると条約に書いているので、これは障害のある人だけではなく、全ての人に共通する考え方で、誰一人取り残さないという原則は行政的には全ての領域にかかってくると思いますので、そういう視点を入れ込んでほしいと強く思っています。防災施策であっても何であっても、全て入ってくると思います。

また、格差や自己責任、孤立、マイノリティなど、色々なことがキーワードになってくると思いますが、全ての人を取り残さないということは、みんな権利の主体であって、エンパワーメントするような、みんなが参加できるシステムが必要であるということが、大きな枠組みになるかなと思います。

国際的な条約の中には差別の定義があるのですが、差別とは、「その人の属性や特性を理由に区別や排除を行い、結果としてこの権利の行使が妨害される、あるいは妨害されるような結果をもたらすという意図を持っているものを含む」というのが大まかな定義であり、私達の社会が何か顔なしでなくて、人権はやはり色々な人の顔がある訳ですから、その顔をきちんと見ていくということと、区別排除が起きないように常日頃考えていこうということが役割なのかなと思いますながら私は参加させていただいています。

また、色々な顔の人たちをエンパワーメントして参加させると同時に、もう1つこの差別を解消する領域として、2016年に法律が3つできて、国のレベルでも色々進んできましたし、自治体レベルでも条例ができたなど、色々な動きがあると思うのですが、この差別というのは、今の定義に翻って言うと、区別排除属性に基づいて区別排除し、権利行使を妨害するというものですから、妨害するのはする側の人たちの話であり、される側の人たちには何の理由もない訳で、する側の行為をどう変えていくか、あるいは規制するような条例を作った自

治体では、どんな行為が差別に当たるのかを市民が言葉にしていくといったプロセスを経ています。

ですが、それは公的な世界の者を救済するのか、色々考え方はあると思いますが、当事者たちのエンパワーメント参加という側面と、同時に差別とはする側の行為なので、このする側の行為に目を向けていくという社会の流れになってきているかなと思います。そういう法律が日本でもできたりしています。

- 考慮すべき変化ということでは、少子高齢化、デジタル化、価値観の多様化、地球の温暖化といった時代の潮流の中で、コロナとウクライナが起きたということが大きな変化ではないかと思います。コロナは時代の潮流ともいうべき先ほど申し上げたような変化を、大変に加速しました。ウクライナは、「安定した物価、低金利、低成長」の経済を「インフレ、金利高、景気後退」に急速に転換させつつあると思います。

こういった具合に、あらゆる変化のスピードが非常に速くなってきました。その結果、対策を一層加速しなければならなくなったということが、私は最大の変化であり課題なのではないかと考えております。

対策を加速していくためには、新しい計画に多くの人が共有する想いのようなものを入れ込むことが大事だと思います。このために、私はあるべき社会の姿というものを、知事の公約である「安心、温もり、ゆめ実現」のフレーズをそのまま使い、「安心社会、温もり社会、ゆめ実現社会」この3つの社会を目指すということにしてはどうかと思います。新しい総合計画に共感する人が増えて、そしてそこに想いが集中すれば、対策を加速するエネルギーが生まれるのではないかと思います。

もう1つ言いますと、その対策を加速することを、限られた予算の中でやっていかななくてはいけない訳で、そのためには、ある程度対策の重点化が必要ではないかなと感じています。そこで私の視点から考える、重点対策をいくつか申し上げてみたいと思います。

まず、安心社会における重点対策は、格差対策としての社会保障や社会福祉の充実が大事ではないかと想います。コロナやインフレ、景気後退などにより拡大する格差、これが生み出す貧困や困窮の克服がやはり安心社会への最大の道ではないかと思っています。

また、温もり社会については、重点対策の第1が子育て環境日本一であることは変わらないと思います。もう1つ、私は生涯現役を第2の重点対策に昇格させてはどうかと思います。高齢者だけではなく、出産でキャリアが切れた女性や、就職して3年目でキャリアが切れてしまった高校生など、全世代の人たちが生涯現役でキャリアを切らさずに働いていける社会こそ、温もりのある社会だと思います。

そして第3は、コロナ後の新しい雇用問題、つまり人材不足にも関わらず、能力のミスマッチにより失業が長期化する、あるいは人材のシフトが進まないという問題です。その対策はいろいろあるのですが、やはりキーは産業政策と教育の連携ではないかと思っています。

最後にゆめ実現社会では、デジタル化、少子高齢化や地球温暖化、こういった時代の潮流と

言うべき変化をチャンスにして、新しい産業や事業をどう作っていくかということではないかと思います。スタートアップということももちろんありますが、既存の中小企業の中で起きている様々な事業変革や、新技術開発など、まさに草の根イノベーションとでも言うようなイノベーションを大事にすること。中小と大手の連携を対策の中に組み込んでいくこと。併せて、介護や保育産業を、少子高齢化や女性活躍を支える新たなインフラ産業として位置づけ、強化していくことが、大事な対策になっていくのではないかと思います。

- 社会保障は本来、申請することによって得られる給付ですが、基本的に申請主義がベースになっていると思います。しかし、申請主義ではなかなか賄いきれない部分も出てきていると思ひまして、その1つが児童虐待の問題だと思ひます。

児童虐待問題で、申請して児童虐待を未然に防ぐケースもあるかもしれませんが、極めて少ない訳で、いわゆる虐待事例を発見し、通告を受けて、虐待を発見するという方が多い訳です。そういった中で、児童虐待を未然に防ぐためには、その相談支援の体制をしっかりと強化しないとイケないと思ひています。相談窓口を作るだけではなく、いわゆる関係性を構築したソーシャルワークというものが私はとても重要だと思ひています。

例えば、極端な話、小学校や保育園などにソーシャルワーカーが常駐するくらいまで徹底して、保護を必要とする、もしくは支援をしようとする過程に、まずは寄り添っていくと、その寄り添うための関係性を、日常の中で様々な専門スキルを用いて形成していくということが大切ではないかなと思ひます。児童虐待については、全国の令和2年の虐待相談件数が全国で20万5000件弱ですが、令和元年度は19万3000件で、約1万2000件の増加なのですが、平成30年から令和元年では、平成30年の約16万件から令和元年の19万3000件なので、3万3000件の増加があったことと比べると、令和元年度から令和2年度まで虐待の相談件数の増加率は低下しています。件数が増えてはいるけれども、増加率が低下しているところをどう見るかというところで、ここからは具体的なエビデンスがなく私の予想になるのですが、コロナによって、いわゆるステイホームで見えなくなってしまっている、キャッチできなくなってしまっている家庭の問題があるのではないかと想像できるかなと思ひます。さらに、これからオンラインが活用されて、オンライン授業などが増え、対面の機会が少なくなればなるほど、児童虐待を発見することが非常に難しくなってくるのではないかと予想されます。

そういった意味では、関係性構築による相談支援をベースとした、ソーシャルワーク体制を教育機関にしっかりと整備していくことがとても重要ではないかなと思ひています。

併せて、この社会教育の部門で言うと、社会的養育はやはり家庭養育優先の原理原則が国としてもうたわれていますので、そこに里親支援も入ってくると思ひます。一般家庭と里親家庭の支援にはもちろん一致する部分もあると思ひますが、やはり特別な支援を必要とする部分は専門性を要する部分もあると思ひています。

そういった意味では、里親支援を行う支援体制、専門性を高めていく体制を強化していくと

ということが、やはり児童虐待予防や児童福祉、いわゆる子育て環境日本一を目指す上では、とても重要な要素なのではないかなと思います。

私からはあと一点、私、丹後の出身でございます。

先日、久しぶりに京都市内で会議があるときに、「今日は京都の会議で、丹後から近くてよかったです。」「どのくらいかかるのですか。」と、「丹後から車で2時間ぐらいかな」と言うと、その方が「私、名古屋から新幹線に乗って45分で来ました。」とおっしゃっていて、やはり、まだまだ丹後という地域は遠いなと思います。

おそらく、今日ご参加の皆さんも、丹後に行くとなると少し遠いなと思われる方も多いのではないのでしょうか。だいぶ道路が整備されて、縦貫道が延伸して便利になりましたが、ぜひ、これが皆さんも丹後が近くなったなと思っていただけるまで、交通インフラなどの整備をお願いしたいと思っています。

会議が終わり、少し食事をして車で9時頃に丹後の方に帰ったのですが、その日は夜間の集中工事期間で八木から下道で帰り、3時間かかりました。やはり、これももしかしたら対面2車線ではなく4車線になっていれば、高速道路を封鎖せずとも工事ができたのかもしれないし、1年に1回という期間、またその時間帯だけかもしれませんが、やはり交通インフラが分断される時間があるのも、何とか解消していただきたい1つだなと思っています。そういった丹後へのアクセス、そして児童福祉、児童虐待予防についての要望というところでした。

●2040年というのは、20年弱の時間帯ですので難しい時期だと思います。

私も色々ところでそういう議論に参加させていただきましたが、2040年ではなく、これから100年後はどうなっているだろうか、という議論をまずしました。100年後だとみんな理想的なことをおっしゃいます。では、100年後の意見が出揃ったところで、50年後はどうなっていますかと言うと、50年後でもまだ理想的です。では、20年後、それから10年後、3年後というふうに意見を集約していきますと、少しずつ現実になっていきます。

ですから、今京都府さんのお考えの2040年というのは非常に立派ですが、一気に40年まで跳ぶのではなくて、20年後、10年後、5年後、というように各テーマ別会合で分析をしながら、委員の方がおっしゃった意見も踏まえて、進めていただけたらありがたいと思います。